レトリックの視点から再考する文学教育

A Rhetorical Perspective on Literary Education

桜美林大学・教授
Professor, J. F. Oberlin University

畑山浩昭
Hiroaki Hatayama

Abstract

One of the main purposes of teaching literature in colleges and universities in Japan has long been to help students interpret literary texts. Given the texts, students are encouraged to analyze the form and content of the texts while they learn various critical methods for literary analyses. However, it is often hard for the teacher to lead her students to one "correct" interpretation. Rather, she typically explains to her students how and why different meanings occur to individual students in class.

On the one hand, there are critical approaches and methods that attempt to explore the correct meaning of texts. On the other hand, there are those that demonstrate that the meanings of texts are "created" by the readers and that there is no such thing as a "correct" interpretation. What happens in class? Students are taught to find the correct interpretation of the text, but they bring various interpretations into the class with their choice of methods. As an extreme case, they are forced to argue and protect their interpretations as correct or better.

In this critical essay, I will discuss the possibility of applying "rhetorical attitude" to teaching literature. In the tradition of rhetorical studies, the meaning of the text or the language itself have not been regarded as reliable media of communication. Thus, many modern researchers, scholars, or teachers of rhetoric do not seek for ways to access true meanings but rather for critical discourses so that we can always be aware that we are dealing with things without absolute meanings. I strongly believe that this attitude can be brought into literary education to avoid unnecessary arguments in class.

はじめに

レトリック学では、言語活動のことを「ディスコース」という。具体的には、スピーチやライティングを基本とする活動のことである。話したり書いたりする側の人のことを「レイター」と呼び、聞いたり読んだりする人のことをまとめて「オーディエンス」という。ディスコースには通常、何かしらの意図や目的がある。それらを達成するために、レイターは論理とことばを工夫する。オーディエンスは、ディスコースを解釈するプロセスの中で、なんらかの影響を受ける。この一連のプロセス全体が、考察の対象となる。表現や理解、レイターの表現や行為、オーディエンスの理解や受ける影響等を考察しながら、レトリック学はディスコースを基本的な研究対象としている。

ディスコースを現代的な学術用語で簡潔に言い表すと、「テクストとコンテクストをプロセスで捉えること」となる。「テクスト」という語は、主に文学や言語学で用いられる用語である。基本的には、文字で書かれたものを指す。口語で表現されたものを文字化する、観察、体験した事などを文字で記す、精神世界を文字で形にする、など、様々なテクストがある。もともと、織り込む、模様にするなどの原義があり、テクストという語にも統一感、まとまり感が伴う。

テクストの研究は、長い間、テクストの解釈に焦点が当てられた。正しい解釈を求めて、テクスト内外の要素の関係、つまり、テクストとコンテクストの相互作用等を精査しながら、意味を確定できる方法を模索してきた。しかし、ポスト構造主義以降、意味、または言語そのものに懐疑の目が向けられ、意味を確定する確実な方法を見出すことは難しくなった。その一方で、私達が生きる現代社会は、テクストを制作したり交換したりするメディア機器、ネットワークの整備が進み、日々、大量のテクストを交換する時代となっている。人間の文化や社会の中で、テクストは重要な役割を果たしている。人々はテクストの意味を確定する方法を手に入れていないにも関わらず、まるで確かな媒体であるかのように、テクストの表出と解釈の連続を、様々なメディア、ネットワークで繰り返している。揺れ動く不安定な意味世界の中で、判断しながら行動している。

この問題に対処するために、伝統的な学問に則って研究を続けることも必要であるが、一方で、テクストに向き合うべき態度についても考察しておく必要がある。どのようにしたら正しい解釈にたどり着けるか、ではなく、テクストをどのようにとらえればいいのか、どのように向き合えばいいのか、についての考察である。使う側にとって有用なものになるためには、テクストそのものの本質や機能をよく知っておくことが肝要である。

本稿では、レトリック研究の立場からテクストを考察するが、主に、テクストに対する取るべき態度について議論する。必然的に教育的な議論となる。テクストが固定的、絶対的な意味を産出することは幻想であることを指摘し、テクストを交換するプロセスの中で発生する動的、一時的な意味の変動こそが、本質であることを主張する。これをふまえ、テクストを交換する技術も機会も動機も高まっている社会で生きる私たちが持つべきテクストリテラシーについて議論しながら、テクストについて最も真剣に取り組むべき、大学における文学教育の基本について考える。レトリックの観点から文学教育についての提言を行う。

Ⅰ． テクストの問題

言語表現は人文社会学系の各領域において重要な研究対象である。例えば言語学は研究の基本として、音韻、形態、語、文など、言語の文レベルまでの構造的側面の研究を中心に発展してきたし、文学では、日常言語とは異なる言語使用を中心に、文章、言い換えると、テクストレベルでの研究がなされてきた。また、コミュニケーション学は、言語と非言語が総合的に作用するディスコースプロセスの中で、発生する意味や人間の行動を理解するために、ことばの本質と機能について学際的に考察してきた。この他にも、人類学や心理学等、言語表現を考察の対象とする領域は多く存在する。

様々な分野で言語表現に注目や関心が集まるのは、言語が人間の意識の中に意味を発生させる中心的な媒体であると同時に、人間が言語に対してしばしば「明瞭な意味」を求めるからである。言語は人間にとって、強力かつ体系的な記号媒体であるが、他のコミュニケーション媒体と共存するディスコースの中で理解されるので、その使用の意味が不安定な場合も多い。語用論等で言語により発生する意味の可能性が研究対象になっているのは、ことばの意味の産出が、人間の思考や行動に大きく影響するからであり、だからこそ「本当の意味」の探求が重要な課題となってきたのである。「明瞭な意味＝本当の意味」を前提とした欲求が、言語使用の意味を研究する領域を発展させてきたと考えられる。

これに伴い、言語を考察の対象とするそれぞれの分野で、意味を確定するための手法も発展した。詩や小説といったテクストを取り扱う文学は、伝統的に、いわゆる「作家」の生い立ちや「作品」が出された人文的、社会文化的、もしくは政治経済的環境要因を、テクストを解釈するための有効な情報として取り扱ってきた。コミュニケーション学では、発話されたテクストを取り囲むコンテクストを含めた、総合的なコミュニケーションプロセスにおける意味の発生や変化に取り組んできた。言語学も、文以上のレベルに取り組むようになり、談話分析の領域で語や文のつながりを言語的文脈の理解につとめながら解析するようになったし､他の領域、例えば、文化人類学や情報学等の理論を、言語学の研究実践の中に取り込むようになった。[i]つまり、テクストの意味を確定することに貢献する情報を取り込むような手法が発展したのである。

一方、現代社会において、テクストそのものが重要であることは量的にも質的にも明らかである。日々、大量のテクストが配布、講読、交換されているという事実があるし、社会や文化を営む上で、テクストを基盤とする判断と行動が繰り返されている。インターネットとコンピュータが普及した結果、テクストによるコミュニケーションの機会が増え、その方法もマルチメディアの発展とともに変化している。現代のコミュニケーションは、メールや携帯メール等に代表されるように、テクストを交換する個々人の実生活と直結している。つまり、「テクストの意味世界」と「現実に生きて思考・行動する意味世界」が直接的に結びついている可能性が高い。テクストの明瞭な意味を求めるということは、個々人の実生活に直接的に関係しているという点において、非常に重大な問題になっていると言える。

このように変化する環境の中、当然、テクストについて教育、研究しなければならないが、

多くの大学で、文学やコミュニケーション学の枠組みの中に、テクストを分析、解釈する講義や演習がある。各大学のホームページ上で公開されているシラバスや講義案内等で見る限りにおいてすぐに気づく事は、例えば、文学テクストがまずあり、テクストを理解するためにその「作家」の生い立ちやテクストの背景を学び、テクストを読解する事を通して、社会や文化を学ぶという案内が多い。また、批評理論を勉強し、批評理論を通してテクストを分析した場合の解釈の可能性を探ろうとする講義シラバスもある。[ii]このような一般向けに出されている情報から判断すると、テクストを材料とした文化や社会、あるいは、テクストを理解するための批評理論の教育・研究であるという印象を受ける。そこには学びの前提として、理解・把握できる言語や社会、文化、読み方が存在し、重要とされるテクストの精読を通して、それらを学び取ることが大学における文学やコミュニケーションの勉強ということになっている。

すると、テクストの「正しい解釈」や「明瞭な意味」を求めるほどに、「明瞭な文化や社会、理論、読み方」等が規定されることになる。なぜなら規定や規範は、テクスト現象に安定した読みを保証するからである。その結果、これまでの文学の歴史の中でも何回も問題になってきたが、ある特定の、前提としてのキャノンを読者に与え、その文化や社会、言語等がゆるぎない存在として提示され、最初からこれらの枠の中のネットワークに組み込まれた状態でのテクスト分析になってしまうことは否めない。

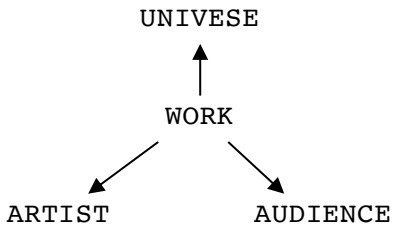
より正しい解釈や明瞭な意味を求めるテクスト教育、あるいはテクスト研究は、テクストの固定的な意味を探究する。しかし、意味が揺れ動き、量も質も時間の早さもダイナミックな現代のテクストコミュニケーションに生きる人間の知識や思考に、どのように貢献できるだろうか？いわゆる文化や社会の枠組みを超えて、ネットワーク上でテクストから先にコミュニケーションを迫ってくる現代の生活環境において、文化や社会を浮き上がらせる読みの規定や規範を設定する事は本当に可能なのであろうか？個々人が、電子テクストによるディスコースを初めとする様々なテクストに日常的に向き合う現代において、テクストの研究と教育はどのようにあるべきだろうか？

こうした問題に取り組むための出発点を考える事が拙論の一次的な目的である。レトリックの観点から考えるテクスト研究の可能性、新しい文学教育の方向性を考察したい。次のセクション以降、まず、テクスト分析という手法が文学の中で、他の分野からの区別と独立という目標で発展してきたことを指摘する。その中心的な活動は正しい解釈に導く理論と方法論を探ることであったが、そのプロセスの結果として、テクストの本質が定義されてきたことを議論する。次に、ディスコース研究の分野でテクストがどのように取り扱われてきたかを簡単に振り返る。それをふまえ、テクストについて書くこと（＝新たにテクストを産出すること）の実践を中心にし、それを交換することが現代におけるテクストの教育研究において意義深いことを主張する。テクストについて別のテクストを産出し、それらを交換する実践が、テクストの「解釈されている状態」を常に浮かび上がらせる手法であり、その継続がレトリック研究のひとつとしてのテクスト分析を発展させるとともに、文学教育の実践において、有益な方法であるという立場を取りたい。

II．文学のテクスト論

文学の伝統的な仕事のひとつは、テクストを選別する事であった。理論的には誰でもテクストを産出することができるが、批評メディアや出版、教育などにおける様々な文学的レトリックのサーキュレーションの中で、特定のテクストが選ばれ、言及され、他のテクストと区別される。そして、選別されたテクストは、文学的伝統（リテラリーキャノン）に何らかの形で位置づけられることになる。当然、テクストを書いた人もその伝統の中に組み込まれ、今度は、その人が産出する他のテクストも文学としての考察の対象となる。どの文化や社会においても、「有名な作品」とか「偉大な作家」といった概念が人間集団意識の中に存在するのはそのためである。[iii]

しかし、テクストを選別するための絶対的な方法がないことに文学の課題がある。選別する前の段階として、読む人がテクストに何らかのパワーを感じ取るというステージがあるが、そのパワーの源は何であるかが考察の対象となり、その要因を見極めることが選別の第一歩となるのである。例えば、テクストがどこまで現実世界を表しているかを評価の基準とする方法がある。目に見える物理的な世界や精神の動き、人間の社会や文化などをテクストがきちんと反映しているから優れているとする考え方である。また、テクストを書いた作者の技法を分析する方法もある。書いた人の表現技法が優れているから、テクストが力を持つという考え方である。それから、読む人の側からテクストを考察する方法もある。読む人によってテクストが与える印象が異なるはずだから、パワーの発生も個々人の読者によって違うという考え方で、その答えを読者に求めようとするものである。さらに、テクストの外部要素、つまり、現実世界の存在や、作家や読者という存在を排除して、テクストの中に構造的統一性を見いだすことによって、テクストのパワーを説明しようとする方法もある。以下の伝統的な図でその観点を理解する事ができる。[iv]



(adapted from The Norton Anthology of Theory and Criticism,2001)

つまり、作品（work）と他の要素との関係の中に理論的意味を見いだすか、あるいは作品そのものの中に意味を見いだすかと言うアプローチである。どの方法も「ひとつの方法」ではあるけれども、テクストを選別するための絶対的な方法ではない。

ただし、これらの方法に共通しているゴールは、テクストの「解釈」をすることである。テ

クストが発するなにかしらのパワーを理路整然と解説し、意味を決定することによりその文学的価値を定めるので、テクストについての総合的な解釈方法が必要なのである。言い換えると、そのテクストについての解釈に正当性があり説得性を持つと、そのテクストが文学として選別されるということである。当然、選別する前の段階として、どの方法が正しい解釈を導き出すかという議論がわき起こる。解釈が、「作家」と呼ばれるテクスト制作者の意図なのか、読者の中に連続的に発生する意味なのか、読者がテクストを読み終えた後にまとめとして構築しようとする意味なのか、あるいは、テクストとテクストがお互いに引用しあう中から生まれるテクストの中にだけ発生する意味体系なのか、その解釈論の議論は今でも続いている。[v]

これについて、Steven Mailloux（１９８９）は、アメリカの文学研究機関に於いて、テクストの解釈が相変わらず特権化された活動とされており、文学研究の目的として君臨していることを指摘している。さらに、解釈をすることによって文学の知識は高まり、「正しい解釈」をするために文学理論が必要であるというディスコースが、文学界のインスティチューションで交わされているのだと批評している。[vi]しかし、正しい解釈はどこに潜んでいるかという問いにかわると、テクストの中、作家の意図、あるいは、読者の経験というふうに、それぞれの理論に基づいた信念によって異なるのである。

文学テクストについての様々な理論と方法論が、それぞれの正当性をレトリカルに戦わせながらもお互いに共存できるシステムが可能となったのは、「文学の知識はテクストの正しい解釈によって深まる」という共通意識としての大前提があり、その大前提こそを、文学を取り扱う力を与えられている教育研究機関やマスメディア、批評家等のネットワーク、つまり、巨大なインスティチューションがスクラムを組んで強めてきたのである。「正しい解釈を求めなければならないが絶対的な解釈はない」という自己矛盾形のアイロニックな命題が、問われる事のないトポスとして文学に潜んでいるからこそ、テクスト分析の実践が長い間続いてきたと言えるだろう。[vii]

文学は批評理論によって支えられてきたが、特に、ロシアフォルマリズムを原点とするニュークリティシズムあたりから、現代的な文学批評の歴史が始まるとされている。[viii]そこには、文学が「独自の研究対象を持つ独立した学問でありたい」という欲求が見られる。テクストの解釈にたどり着くために、テクスト以外の要因、例えばそのテクストが世に出た時の社会情勢や文化、または、テクストを書いた人についての情報、あるいは、読者の典型的なレスポンス等を分析するということは、言い換えると、テクストそのものを分析しないで、何か他の要素によってテクストを解釈するということである。明確な意味、正しい解釈を求めようとするがあまり、関係するとされるすべての要素を考察の対象に含めるのであるが、このような方法では、例えば人間の心の働きを研究する心理学や、集団としての人間の営みを考察する社会学系の分野と研究対象を同じくすることになり、文学が他の領域に手を出しているという印象は否めなくなる。ニュークリティシズムは、テクストの中に言語構造を中心とする形式的なルールがあり、それぞれの部分は全体像を構成するために機能しているとする発想から、その全体像とはテクスト自らが作り上げるとした。そしてその批評作業の対象であるテクストは、文学固有の、独自のもの（プロパティー）として認められることになるのである。文学がそれとして、独自の研究対象を持つ独立した学問として発展するために、ニュークリティシズムという理論

と手法が後押しした結果となったのである。

しかし一方で、「テクストそのものの構造が自然に全体を発生させる」という前提は、文学の独立のためには役にたったかもしれないが、「解釈」を、意味を感じているはずの書いた人や個々の読者から引き離すことになったとも考えられる。テクストを読みながら、実感として意味を感じ取るのは読者自身であるとしても、テクストそのものの構造に焦点を当てる事で、読者の意識がテクスト分析からは除外されることになる。読者の意味を除外することで、逆に、テクスト自身がその統一性の中で産出する唯一の意味解釈が可能かのような言説さえ発生するのである。

実感として発生する個々の読者の意味は行き場をなくし、当然反発もおこった。また、テクストの中だけで分析しても限りがあることがわかってきて、結局文学はまた新たな展開に向けて変化する事になった。そして、テクストの外へと向かってインターテクスチュアリティーの概念が生まれたのはよく知られていることである。

しかしここでもテクストが指し示す対象を実際の社会や文化、あるいは、読み手の意識には求めなかった。よく使われる例であるが、辞書である単語を引くと他の語で説明されて、調べ続けるうちに次々と新しい語が出てくるので、いつまでたっても認知できる物理世界の現実の物事や精神世界の気持ちそのものにはたどり着けないのと同じように、テクストもまた他のテクストとの関わりの中で成り立っているとする考え方である。したがって、テクストの意味は、他のテクストとの関係の中で発生するので、自然や社会、心理とは離れて、ここでも文学が独立して研究対象を持ち続けることができたのである。

インターテクスチュアリティーという概念の中には、テクストあるいはインターテクストの中に発生する世界がより真実味を帯びており、その中で描かれる社会や文化は、「実際の」社会や文化をそのまま表しているわけではないという考えかたが含まれている。また、「作者」は、テクストを作り出しているのではなく、作者の意識の中に内在する社会や文化、イデオロギー等が「作者を利用して」テクストの中に再生するという考え方に通じる。テクストの原型論である。[ix]このような考え方が出てきた背景には、テクストをそれとして研究対象とする文学の欲求としての姿勢が原点にあり、もはや社会や文化は表現の対象ではなくテクストに紡がれている模様で、どちらかというと人間の意識の中にある社会観や人生観が、様々なテクストを産出するごとに再生されていく感じに近いものとなっているのである。

III. ディスコース研究のテクスト論

テクストを研究対象とするもうひとつの有力な領域はディスコース分析である。１９８３年は『Discourse Analysis』というタイトルでふたつの本が出版されたことによって、ディスコース分析にとってはその存在を知らしめる年となった。ひとつは Michael Stubbs の単著であり、もうひとつは Gillian Brown と George Yule の共著である。[x]しかし、これらがディスコース分析の始まりということではなく、J. L. Austin が「発話は行為である」とす

る議論を始めた[xi]１９５０年代後半からの流れを、ひとつの領域として認識しようとする動きであるし、文学におけるテクストの分析を、より科学的にする手法として、例えばテクストとしての文法を発見するような動きの現れであるとも言える。ディスコース分析は現代においても非常に盛んで、様々なアプローチが開発されているが、どのアプローチにおいてもテクストは非常に大事な考察の対象であることには変わりない。[xii]

言語学の理論を中心としたディスコース分析がある。言語学が研究の対象をテクストレベルに移したということであるが、文構造の研究を文以上のテクストレベルに上げて、ディスコースの全体像をテクストの結束性を中心に分析する手法である。言語学的な要素、つまり、語や文法が、ネットワークによりテクストとしてまとまっていく様を明らかにするので、この点においては、文学のニュークリティシズムの手法と共通する部分もある。テクストが言語により作り出されているという前提に立つと、言語学が文の文法から文の連続であるテクストの文法へと移行したのは自然であると言える。

また、機能的な言語の理解、特に、社会文化的枠組みの中における言語使用についての分析も盛んに行われる。文（発話）が交換されて会話となるにはどのような仕組みがあるのか、どのようにして社会的な関係が構築されていくのか、また人間は、そのようなディスコースで何をするのかなど、言語使用と人間社会の関係を細かく調べるのである。[xiii]テクストがコンテクストとともに時間と空間のプロセスで展開していく様を分析することによって、様々な社会文化的側面を発見する活動である。

ディスコースを総合的に分析する中で、テクストの取り扱いについてはそれぞれのアプローチで異なるが、ひとつだけ共通しているのは、「学際的に取り扱う方が真理に近づく」という命題である。[xiv]つまり、言語学だけの知識だけでディスコースを分析するのではなく、人類学や心理学の知識や手法も応用しながら、その現象の仕組みや問題を理解しようとする姿勢である。するとディスコース分析の事例研究等で用いられる用語や概念として、例えば、発話行為、隣接ペアー、非言語、参加者、格助詞、異文化など、異なる領域で用いられる用語が混在しており、これらがひとつの研究の中で用いられるという事態がおこる。もし、基本的な考え方を、テクスト＋コンテクスト＝ディスコースとするならば、学際的にディスコースを研究する中で当然、テクストについても様々な理解のされかたが起こるだろうし、ディスコースの真理に近づくための前提として、テクストの存在がなくてはならないのである。

また、ディスコース分析が学際化し様々なアプローチが取られる中で、共通していた目的は、「現象を分析することによって様々な構造を発見する事」であった。上述したように文学は「テクストを解釈すること」を大義名分としていたが、ディスコース分析は「学際的である」ことが大事であると同時に、テクストも含めた「ディスコースの構造を発見すること」に全力を注いできたと言える。様々なディスコースを分析し、特徴を洗い出し一般化して、全体の理論体系の中に埋め込んでいく。このような作業の積み重ねが、ディスコース分析という領域を学際研究でありながらも独立した領域として発展させてきた。テクストについても、例えば情報構造や語彙概念の繰り返しと省略、トピックとコメントのパターンなど、様々な特徴が構造として記述されることとなった。

文学と大きく異なるのは、ディスコース分析では、実際の社会文化的事象の一部としてテク

ストやコンテクストがあると理解されているので、「実際のコミュニケーション経験と行動」と「ディスコース（テクストとコンテクスト）」が表裏一体的に使用される。その意味で、テクストは非常に真実味を持ち、テクストで表されていることが、実存する文化の代替表象となったり、過去に起こった出来事を再現する媒体となったりする。社会学や心理学の研究対象そのものがテクストであると言っても過言ではないほど、真実味を帯びている。

ディスコース分析におけるテクストは、社会文化における人々の実際の表象であることを前提とし、ディスコース分析の主な仕事が構造を発見することであるとすると、社会や文化をある程度、固定的に把握することが可能であるとする土壌ができあがるし、テクストもまた、コンテクストとの関わりの中で注意深く理解する限りにおいては、社会文化的事実を表す信頼性の高い媒体であるという議論が補強されるのである。例えば、日米におけるパーティー会場での会話を観察、記録、分析し、言語テクストとコンテクストを総合的に考察した後で、異文化としてのそれぞれの位置づけや、より良い関係づくりのためのストラテジー、提言等を行うことが可能であろう。すると、テクストも含めて、「このようになされる」という構造が、様々なディスコースに共通に見られる特徴、あるいは、同じようなディスコースに応用、適用できる理論的知識として定着するようになる。これは、文学で言うと、ある一種の「キャノン」に相当するもので、多くの人々にディスコースの前提として与えられてはいることになりはしないだろうか？

IV．個人にとってのテクスト

文学におけるテクスト分析やディスコース研究におけるディスコース分析の足跡を振り返ると、それぞれの領域が発展した背景には、「個人からテクストを取り上げた」あるいは、「個々人が個々のディスコースで感じ取るテクストの意味を取り上げた」という事実があることがわかる。「解釈」や「構造」という一般化された知識と、それにたどり着くための理論や手法を構築することが正当であるとする主張の原動力となったのは、やはり、その領域を個別の研究対象を持つ独立した領域として発展させたい思いも含まれているであろう。人々の意識の中に意味を産出する最も強力な媒体であるテクストは、どちらの領域にも共通して重要な対象であり、だからこそテクストを考察の中心にすることは確かな研究材料を得たことになるのである。例えば、社会文化的事象の考察にしても、スピーチシチュエーションやスピーチイベント、スピーチアクトといった概念を把握できるのは、テクストがまとまった意味を産出するからであり、意味を感じ取る人間の主体が、テクストの使用による意味を区分する事ができるからである。

しかし厳密に言うと、最初の意味が発生するのは、テクストに接する「個人」の意識の中である。個人の意味の集大成が社会的意味であるとか、理論的な読みを通して得られるのが本当の意味であるといった議論を起こすことは可能であろう。しかし、テクストは個人に読まれない限りは意味を発生できない。個人がテクストと向き合う時のファーストステージで発生する意味は、テクストを研究する学問にとって必要不可欠な考察の対象であり、最も注意を注がな

ければならない意味である。すると、構造の発見を目指すディスコース分析にも、やはり留意すべき事項はある。

そう考えると、スタンリーフィッシュの「テクストはどこにあるか、それは読者の読みにある」という考察から、読者反応理論が発展したことは特筆すべきことである。[xv]しかし結局は「ひとりひとりの読者」がそれぞれの意味で読むという行為が第一義的に保証されるには至らなかった。やはり、あるテクストを読むためには、それを享受できるだけの資質を持つ「素養ある読者」でなければならないし、その人たちの共通する読みが「解釈共同体」となって、テクストの意味を決定するという結論になってしまった。つまり、「ばらばらな読みと意味が読み手の数だけ存在する状態」を受け入れることを理論として正当化できないのである。誰が受け入れなかったのか？体系的知識を欲する学問そのものであろう。なにかしらの全体像や統一感、あるいは整理整頓された構造的状態を欲するために、混沌とした状況をそのまま受け入れられないのが学問の性質なのである。言い換えると、読者反応理論もまた「自由な解釈が保証されている中での正しい解釈への欲求」に、修正されたと判断してもいいと思う。

意味のファーストステージである個々人の読みが日常的におこっているのが現代社会である。テクストコミュニケーションのためのハードウェアとネットワークが発展、整備されてきている環境で、事実として「ばらばらな読みと意味が以前とは比較できないほどの量と質で存在している」状態である。テクスト分析の研究は、その領域の発展保守のために、テクストを読者から取り上げてきたが、社会の変化の中で人々は、より多くの時間をテクストの読みと産出に費やし、テクストの中でリアリティーを感じながら生活しているので、学問の外では、実質的にはテクストが個人に返却されている時代なのである。テクスト研究、ディスコース研究はこの状態に対応しなければならない。

V. レトリックによるテクスト論と文学教育

現代社会において文学教育、特に、テクスト分析の可能性を考える場合、レトリックによるアプローチが有効であると考えられる。文学やディスコース分析の中では、正しい解釈やディスコースの構造、一般化した社会や文化等について知識を体系化してきたので、言い換えるとそれはテクストや社会、文化の「文法」を探し求めていたことになる。言い換えるとそれは、「スタンダードな読みの存在＝正しい読み方」を仮定することであり、多くの読者が感じ取るテクストの意味は、それぞれ「異端な読み」とされる。文学の批評理論やディスコースの理論が正しい意味に導くということが前提となっている。

レトリックも「説得術」としては、説得のための文法を希求していたのは事実である。しかし一方で、「実践」としては、力を帯びてない見方や思考、あるいは社会的弱者に、パワーを与える動機となってきたことも確かである。大衆をひとつの方向に動かす必要がある状況というのは、その時点でのレイター（rhetor）はマイナーな立場であり、言い換えると、異端の見解を持つテクストの発信者である。したがって、文法に対して「逸脱する」ことにより、説得

力を産出して一般理論やその時のスタンダードへの反対声明を表明するのがレトリックの習慣なのである。つまり、個々人に発生する意味を拾い上げ、ディスコースとして表に出すことと同様の批評実践が、レトリックの歴史の中で行われてきたのである。

異端な読みの存在を前提として認め、それを真理として捉えている以上、絶対的な真理（つまり、文学でいうところの正しい読み）を前提としているわけではない。人間の思考や認知認識自体は、本物としての実感があるが、それらを何かしらの媒体によって表現したり、意味を共有したりしようとする瞬間に、その媒体物は本物の代替物であることから、嘘のコミュニケーションになってしまう。偽りを認めた上での「読み」に、絶対性が宿ることはできない。レトリックはこのことを十分、承知しているのである。

テクストによるコミュニケーションが日常的に起こる現代では、文学やディスコース分析におけるテクスト分析とは別のテクストリテラシーが必要であろう。文学テクストや現象を記録したテクストを精査する活動は、積み上げてきた知識の体系として重要な意味を持つが、個々人がテクストを体験して意味を感じ取り、場合によっては自分の思考や行動に影響を与えるコミュニケーションについてのリテラシーが必要で、そのためのテクスト分析を教育研究しなければならない。レトリックから始めるのは、テクストと人間の関係を「リアリティー」として研究してきた伝統的学問だからである。インターテクスチュアリティーの中に発見されるテクスト内の社会や文化の原型でもないし、また、ある社会文化的現象を観察記録し、分析した結果としての時間や空間を超えて把握できる文化や社会でもない。レトリックにおけるテクストは、物質世界あるいは精神世界の現実の表象が前提となっていると同時にテクストそのものが創造してしまう虚構の世界も同等に認識してきた。アリストテレスのように、過去、現在、未来をそれぞれ直線上に理解するということは、過去の事実も、現在感じる真実も、未来の想像も、すべてリアルであり、かつ、一時的、動的でもある。この「混沌とした、揺れ動いている状態」こそが人々の知識であるとする考え方を、レトリックはその理論や手法の中に含有していると私は主張する。ダイナミックな部分、変動する部分を止めながら、テクストはその制作と解釈の中にさらされているので、常に言及し続けることこそが真理に迫っている状態であると解釈しなければならない。そのような発想をテクスト分析の中に、レトリックは持ち得るはずである。

したがって、現代における文学教育は、テクストの解釈や分析で終わってしまうのであればゼロに等しい。テクストの解釈としての固定的な意味や、テクストが指し示す対象を探し出す事も有意な活動であるが、テクストのダイナミックな本質に向き合い、個々人間のテクストエクスチェンジの実践の中から真理を浮かび上がらせようと努力している状態が学びの場であり、テクストコミュニケーションの時代に対応できる姿勢である。絶対的な解釈はある特定の文化や社会を人々に押しつけることになるが、テクストについてのテクストの交換は、社会や文化の可能性を多くの他者に気づかせる。これは、どちらの意味や解釈が正しいかではなく、様々な解釈の共存を前提とした、テクストによる対話である。インターテクストをお互いが気づくこと、精神的、物理的に感じ取ることができる現実と、テクストの世界との擦り合わせを精査すること、テクストの様々なジャンルの要素を、実は共有していることが、文学教育の実践に必要なのである。このような状態を作ることが、レトリックの考え方に基づいた文学教育の新

しい仕事である。

おわりに

現代の社会文化におけるテクストの本質や機能を考える上で、伝統的なアプローチには一定の効果があるものの、テクストが個々人の現実的な生に直結するような高度なメディア・ネットワーク社会にあっては、そのコンテクストに伴うテクストリテラシーが必要であろう。拙論では、テクストが学問の伝統においてどのように取り扱われたかについて、特にオーディエンスの目線から問い直し、問題点を指摘した。その上で、文学教育におけるひとつの可能性について、レトリックの観点から議論した。

これをふまえ、実証的な研究が今後必要になる。個人が制作するテクストを、メンバーシップを有するコミュニティーの中で解釈、交換する活動を通して表現と理解のプロセスを体験していく様を記述しなければならない。テクスト、物理世界、精神世界のダイナミックな関係を理解し、常に動いている意味を追いかけている状態こそが、絶対的な解釈を発見しようとする知的活動に代わるものであると考えている。現代のテクストを取り囲む状況に対応するための新たな研究と教育が必要である。

注

[i] 言語学がどこまで個別の領域として区切る事ができるかは明確ではない。談話分析に最も大きく関わったのは社会言語学であるが、Brown and Yule（1983）のように、言語学的分析による談話の文法を目指したものもある。

[ii] GOOGLE(http://www.google.co.jp)による検索で、文学、テクスト、講義などのキーワードで調べた。非常に多くの大学が、テクストを分析、研究する講義や演習の授業を行っており、シラバスや講義案内を出している大学も多い。

[iii] 特定の作品や作家を大衆向けに紹介する目的で編集される場合がある。例えば、Harold Bloom（1994）。しかし、キャノンを常にアップデートしながら批評の対象として編集されるものもある（Richer, 1989 など）。

[iv] Vincent B. Leitch (2001)編集の「The Norton Anthology of Theory and Criticism」、５ページ。

[v] アプローチによって導き出される解釈が異なる、あるいは、解釈の可能性を論ずる文献は数多くある。近刊でよく整理されているのに、丹治愛編（2003）の「批評理論」がある。

[vi] 「Rhetorical Power」、４～６ページを参照。

[vii] ひとつの命題がいかにして原理となり、力をつけていくかについては、Michel Foucault（1971）の「The Archaeology of Knowledge」を参照。特に、３１～３９ページ。

[viii] 丹治愛、１０ページ。

[ix] Northrop Frye の「Anatomy of Criticism」を参照。158～239 ページ。四季とテクストジャンルについての議論。

[x] Gillian Brown and George Yule, Discourse Analysis, Cambridge U Press, 1983. それから、Michael Stubbs, Discourse Analysis, U of Chicago Press, 1983.こちら

にはサブタイトルがついており、The Sociolinguistic Analysis of Natural Language となっている。

[xi] 1955 年の Harvard 大学での記念講演。しかし『How to Do Things with Words』（1962）でオースティンの考え方を知った人が多い。

[xii] ディスコース分析の多くの本に参照文献として取り上げられるのが、Deborah Schiffrin の『Approaches To Discourse』（1994）で、８つのアプローチが議論されている。

[xiii] これについては、Barbara Johnstone が『Discourse Analysis』（2002）を、学問としてではなく、様々な社会文化的問題に答えるための手法として書いている。

[xiv] このアプローチを取った教科書としては、Jan Renkema の『Discourse Studies』（1993）がある。Schiffrin とは異なり、ディスコースの様々な側面についての学際的研究手法を紹介している。

[xv] ここでの議論は、「テクストの意味を決定できるかどうか」ということである。Fish の『Is There A Text in This Class?』（1980）はエッセイ集であるが、Fish がどのようにして意味を考えたかがよくわかる本である。本稿に特に関係あるエッセイは３０３～３２１ページ。

参照文献

丹治愛（2003）『批評理論』講談社。

Bloom, Harold.(1994). *The Western Canon*.
New York: Riverhead Books.

Brown, Gillian. and George Yule. (1983). *Discourse Analysis*.
Cambridge: Cambridge University Press.

Fish, Stanley. (1980). *Is There A Text In This Class?*
Cambridge: Harvard University Press.

Foucault, Michel. (1972). Tran. The *Archaeologyh of Knowledge*.
New York:Pantheon Books.

Frye, Northrop.(1957). *Anatomy of Criticism*.
Princeton: Princeton University Press.

Johnstone, Barbara.(2002).*Discourse Analysis*.
Malden:Blackwell Publishers.

Leitch, Vincent B. (2001). Ed. The Norton Anthology of Theory and Criticism.
New York and London:W.W.Norton & Company.

Mailloux, Steven. (1989). *Rhetorical Power*.
Ithaca: Cornell University Press.

Renkema, Jan.(1993). *Discourse Studies*.
Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Schiffrin, Deborah. (1994). *Approaches to Discourse*.
Cambridge: Blackwell Publishers.

Stubbs, Michael. (1983). *Discourse Analysis*. Chicago:
University of Chicago Press.